

急就なる奇觚（急に就いた波磔）衆に与える。諸物、名姓字、分別部居し、雑廁せず。用日約少にして誠に之に務めれば、必ず憲び有らば其の章に道を請う。宋は延年、鄭子は（彼）方に、衛益寿にして、史は昌歩し、周千秋にして、趙の孺卿は爰に世を高くする兵を展べる。

第二、鄧萬歳にして、秦は眇房。郝は利親にして、馮漢強し。護郡を戴き、景君明らか。奉徳正しく、桓は賢良にして侯、仲郎と任し、逢う時、田と広国は、栄惠常にし、烏は承祿し、孤を横たわらせ、朱交え便す。孔はだ傷つく師の猛虎は、石に敢えて当り所侵さず、龍未だ央（ゆ）かず、伊嬰齋にす。

第三、翟回り慶び畢く、稚季終わる。昭なる小兄、柳堯舜、葉禹湯、淳くし干に登る。光を費通し、拓は恩を舒べ、路は陽を正す。霍たる（連なりたる）聖宮、顔文章、莞（むしろ）財が有り、曆、徧く呂張す。魯は賀憲し、灌宜しく、王は程を忠しく信ず。呉仲皇、古きが終わるのを許し、賈友は倉を並べる。元始は韓魏にして広い。

第四、柏、杜、楊を掖み、容調し富貴を曹す。李は桑をおさめ、肅たる彭祖は宗談に屈し愛君を取り囲み、高大なる考を襄う。美を得賜し、燕楚は巖たり。薩たる勝客、邗将を聳し男弟を求める。過説は長く、祝は恭敬す。審らかにして妨げなく、賞賚を贈る。らい士の梁、成博の好、范は羌を建て、閻は驩喜す。

第五、寧ろ忘れる可き、苟しき貞夫。茅を厚く渉し、田は細かく子はあり、内黄を謝し、柴・桂林は温かく一面に広がり、叔として驕らない。邴は勝箱とし、和して高く広がり、芳しく若く敷き、毛は羽を遺し、馬・牛・羊は尚次、鮮やかなり。丘は剛く、陰で賚は参り、翠の鴛鴦は、諸々に渡り及び、萬段の郷は冷幼の功をたて、武は初めて盛える。

第六、製衣し池を回り、素晴しい美人の部屋がある。軍は減り取りやめ、橋の穴から陽がさし、原は福を輔け、奴を棄つるを宣べ、殷は満息にして、北方の族を囲み破り、慮り尊く臥し、憲義は渠し、草群は游威し、邪なる地は余り、平定を談し、孟伯は舒かに、葛は咸軻し、敦い鑿を求め、憂いゆるやかに従う。

第七、錦繡の纓旄は雲爵を離れ、風に乗り鐘縣かり華 楽しむ。豹首落ち兔追い、鶴を捕まえる。春草は茂り、鶏は企だち、鳧翁は羽洗う。鬱金（祭祀の花、百合の類）は半ば見へ、霜は白籥に付く。青白色、蒼艾色、緑色の玉、黒紫色の木ぬたがある。栗を蒸すと絹は紺色になり、赤色・紅色がもつれる。青い綾絹は連なり穀は美しく、潤いは鮮やか。厚絹は廻り絹は練られ、白い帛は薄い。

第八、真赤のぬいとり糸と、綿とめんを紡ぐ。裂布、ぬさ袋、袋は直接お金にならず、服は連なり、精布と絹は並ぶ。借貸と売買を商いは欲し訪れ、財産は市に満ち、大きい布は広く並ぶ。麻を纏い、屑麻で包み整える。印の紐は組まれ、位より異なる。丈・尺・寸を量り、斤・両も計る。これらを受け取り自分に縁は与えられる。

第九、稲・もち黍・もちあわ・きび・あわ・あさ・うるしは存し、麦もち・米もち・麦ごはん・甘い豆のあつものも存す。あうい(菜葉)、にら、ねぎ、タデ(辛采)、らつきよう、しそ、しょうが、はじめもまた存す。草と塩と酢、味噌、醤油を混ぜ合わせて打ち、香草、にんにく、なずな、からし、にんにく、山椒は香る。熟した葎の葉は冬の日によく採れ、柿・梨・赤い林檎は露と霜を待つ。なつめ・あんず・うり・にわうめ・米菓子・飴・錫(あめ)はあり、園では、果物・瓜の実がとれ、米の糧を助ける。

第十、甘いむぎかすは安らかに美を奏でる。上着、下着は表裏し首の裳裾は曲がる。単衣は合わせ着され、袴と束ねた羽を重ね着する。前掛けの布は尊さを失い、針と糸でほころんだ縁は縫われる。民間の履と儀礼用の履はけがれていて、布とうち紐で覆われている。子供の履と革靴は角の様に(天を)仰ぎ、粗い布は足袋に用いる。衣となめし皮は、牧人の為に借りない。(皮の)堅さを仲間と比べいよいよ勝る。

第十一、草の履物と子供の皮履は荒く弱く貧しい。毛織の衣と索(つな)は化外の人によって選ばれる。俗を去り義に帰り、親に任え来たる。訳し導き、助け拝み、家来を構える。西方のえびすと、北方の未開の民は十五陳である。県官は倉で米を食べ、金と銀を帯びる。鉄の斧、鎌、鑽(きり)大鎌等があり、鉛と錫で練られたタカツキ、かま、鍋があり、大すき(犁)、曲がつたあらがねの斧、のみ、くわがある。

第十二、銅の鍾、鼎、首の長いかね、小さな盆ひしゃく、ちようしがあり、車の輿の軸、車軸の巻金、車のくさび、鍵は治られ、塞がれ立てて作る。竹の器、大きな傘、頭につける日傘、タカムシロ、蓆があり、米穀を入れるざる、穀を盛るざる、米のあげざる、色のない竹のふせごがあり、竹の器、捕魚用の小さい箱、ほうき、飯器、長方形のはこ、籠がある。長方形のはち、タライ、机、さかづき、大きく開いたはちがあり、ひさご・ひしゃくがあり、三升半のさかづきと小さい箱がある。丸太のふた、丸いたる、たらい、さじ、竹筒があり、ほとぎ、はち、かめ、極小の水の壺がある。

第十三、こしき、大がめ、小さい盆、ホトギ、カメ、飯器がある。つるべとなわとつなを紡ぎ重ね、ヌノイトで縊る。手紙を署で郵便家が調べる。板、柞(ははそ)は谷口の茶に産し、水中には、お玉じゃくしと蛙とがまがいる。こい・ふな・かに・ふぐ・あわび・えびがいて、妻は嫁に子供の持ちものを問う。卑しい男と女は私につき、床と前の横木を枕

とする。若いがまと草のむしろととばりと幕と旗がある。

第十四、塵をうけ、戸にすだれとひもを縦につける。鏡の蔓草は荒く、各々のつくりの違いを比べる。多くの香り草の紅とおしろいが、恩澤を施す様に竹筒に入っている。髪と身を洗い、眉毛と頭髪を切る人は少なく集まっている。髪飾りには他に類を見ない程立派な絵がほられている。臂には龍の形をした琅玕と虎魄が係っている。きれいな丸い玉と、赤い玉と、赤い玉がついたかめがあり、玉びん・腰におびた玉は美しく用いられる。小児の鬼を射て邪を辟け、群凶を除く。

第十五、大琴は中が空洞で琴筑・琴がある。鐘・石の楽器・ふりつづみ・ふえ・馬上のつづみは明らかに五音が雑会して歌謡う声となる。役者はおどけ笑い観て庭による。酒を飲む人にはべり、昔の事で打ち解け合い、酔いやむ。料理の司は使令によって切り割り給う。薪や炭で小雀とあし(葦)がおいしくなる様によく炊き、粗く切られた肉と、細かく切られた肉、あぶった肉、切り身は各々刑があり、しおからいお酢は淡く、にごりを分かち清くなる。

第十六、肌とたなししとほし肉とひものは生臭い。酒のあきないは、にごり酒をかもし、たかつきののり(程)をかんがえる。碁ばんと博打は相易い。冠、かぶりもの、かんざしは黄色く、髪は紐で結ぶ。頭、額と、首に眉と耳、鼻、口、口びる、舌、歯の牙、歯、ほほ、あご、ぐび、うなじはなぞらえており、肩・上腕・ひじは、くしとしての手の指をまいている。胸、脇、喉、全胸があり、その至る所に六骨はこえて伸びている。

第十七、腸と胃と腹と肝と肺と心臓を主とし、脾臓、腎臓等の五臓とスクロムシの様な乳首がある。尻は寛く、背骨は人体の要である。股、膝、膝骨、すねは柱としてあり、こむら・くるぶし・かかとはお互いに寄りそう。ほこと鑄型を作る時の中身、たて、やいば、刀と曲がつたてつがあり、くつ・つばのある剣・けん・いがた・つるぎ・つば・やじりがある。弓・大弓(石弓)・矢・よろい・兜・かまがあり、鉄垂れ、杖はつき、戟の柄、つえぼこはある。

第十八、ほろぐるま、ながえとよこぎ、車軸はしつかりしていて、車輪の矢・こしき・くさびがあり、柔らかい桑の木が所々用いられている。車軸の穴・車の横木、みみな草・たずなの穴は納まり、牛の角木がある。たるきを蓋い、円いたる・くび木・せまく縛られた車の横木があり。たずな・馬の胸がいがあり、絡頭より馬背にひく皮はたずなを強くつなぐ。しきもの・まつほほどは薄く、くらとくつわと馬の額に加える金具が(馬を)ふさぐ。胸がいと、しげる形のくら飾りはまじり輝き、皮と倉に赤いうるしが塗ってあり、なお黒い。普通の建物、いおり、たかどの、堂がある。

第十九、門・戸・井戸・かまど・ひさし・米倉があり、たるき・木片・うすいすだれ・飯器・かわら・屋根・はりで（家は）できている。壁とかきには泥と白戸が塗られ、みきとかたい木と板と長板が周囲をかこっている。便所は汚賤地でみだれている。焼かない敷、瓦はつきれ、うまやは東に位置する。からうす・ひきうすをまわし、春でおとし、箕で糠を除く。田百畝をあぜと畝で区切り、田を耕して土を起こし平らにし、さかいのあぜはつらなり、長はいて、すきと、からすきと、くわがある。

第二十、種と樹と蔓草（アカラシ）は税として貢ぐ。稲をひろいと、うすずき、さらいをぬきさる。きり、あずき、にれ、まつ、チャソチン（古来琴に用いた木）、あふち、えんじゅ、まゆみは、いばらととげが葉と枝を助ける。赤い馬、浅黒色の馬、蒼白雑毛の馬、まだら馬（獣の一種、虎を食うという獣、馬に似る）、黒い馬、茶色の馬、うさぎうま、クロミドリ馬、黒・白の毛のある馬は、馬飼いと走り、怒り飛び越える。メヒツジ、黒色の牝羊、去勢の羊、大角のある牝羊、小ヒツジ、色が黒い牝羊、六種類の羊を畜へ代わる代わる当番をし、豚、いのこ、いのししもいる。牝いのこ、へこきぶた、小犬、犬、雞、ひながいる。

第二十一、三歳の牛、二歳の牛、牝牛、小羊、小牛、小馬がいて、雄しい牝牛と牝牛がお互いに連れ添って走っている。米かすとぬかの汁、あつものの野菜、麦わら、きりわら、わらがある。鳳凰のさかずきがあり、白鳥、コウノトリ、ガン、アヒル、キジがいる。たか、はやぶさ、蛇の様な尾の鳥、ハマナヅルがいて、キヌガサは貂の尾でできている。はと、いえぼと、ふなしうずらは網の中で捕えられて死に、とび・はやぶさ・みみずく・ふくろうは驚いてお互いに見られる。豹ときつねの蹴爪は虚しく、やまいぬと、犀と、野牛がいる。たぬき、うさぎは飛び、かも、狼、なれしか、おおなれしかがいる。

第二十二、のろしか、大鹿の主なる鹿（シユビ）、大鹿、鹿は履物の皮を給う。寒気は腹に泄注し、腹はふくれる。かさぶた、頭痛、ヒゼン、らいびょうがあり、おろか者は耳が聞こえずに忘れる。できものと小児の病気と、しびれと重病と熱病があり、腹痛み、極度の蟲病（生の肉を食べ生じる病気）があり、狂い、気失い、声響く。健康をそこない、気逆らう病気があり、痛みを生じ、尿道が濁し爛して、小便に毒混じる病気は（小便が）温かく病む。喉がかわき、うちもだえ、せきはよく出る。黄疸、セムシ、痔、まなじりを痛める病気、眼のわざわいがあり、とくに老いて衰え廃れ、医者を呼ぶ。

第二十三、お灸をさし、薬で治し遂に邪を去る。薬草であるこがねやなぎと、砒素を含む鉱石とあまあかなを飲ませる。よく茂ったあまくさ（薬草）と、紫色の薬草とアリノミは器にもられる。鳥のくちばしとさんしょうの華の実は混ぜられて夏の半ばは、どんぐりと、

よもぎと、たくご（植物でつはぶきの異名）が薬作りの為に混ぜられる。弓は、桂ときからすうりという厚い木の皮からできているために、窮み、カントウ（ふきの異名）と、ふきと、ハハグリが薬草としてあり、シヨウガは狼の牙の形に似ている。遠くは志は続き、他国の人が来るのを断つ。宿場には、桔梗と亀の枯れた骨が残る。

第二十四、雷は鳴り、矢と小すずめときのこと、かりやす（草）と兎は、器にもられ、夢を占い、責め、たたり、父と母は恐れる。祠を祀り、社はくさむらを保ち、動物を獵り奉じる。（神棚の前に）行き、觴を並べ、禱り、鬼神より愛す。棺と小さい棺が遣られるのを、踊りながら見送り、喪を弔い、悲しみ、哀れみ、顔と目が腫れる。哭泣し、垣を廻り酒を地にそそぎ、神様をまつり、つか・墓で祭をする。これらの物事で全て終わり、五官は退出する。上に仕え、人道を学び、詩と考経論をうたう。

第二十五、春秋時代の尚書は文を律せしめ、礼を治め、低く卑しい身のために掌どる。よく知り、物事に広く通達し、多くの事を見て聞く。そうしていると名は顯われ仲間と殊に異なり、追い抜き、大きく擢でて推挙され白黒は分かれたる。牛飼人のために、学問を積み、上り究める。丞相と御史郎の中君はそうしており、大臣と参議大中納言は部下をつけ勲し。前後には常に、各々の諸將軍が侍る。

第二十六、大名が並び邑を封じ土地があり、大臣がいる。學問を積み、鬼神無き所まで致り、広く京の行先を佐け、民を治め執政する。潔い事と平らかで正しい事はとって従い、親を大切にす。変化と迷惑の別を新たに敏し、よこしまな者は並び塞ぎ、それらの人は理の馴れからきている。更に終わって誠に帰り、自ら詣でて寄っていく。雜貨を司る役人や、少数の倉は国の淵であり、衆を援け錢穀を均しく分かつ。

第二十七、獣の陶器を造り、罪人を正すおきては在し、罰と詐偽をせめ、罪人をしらべる。刑獄を掌る役人は正しく監て、未来と過去を考える。総ての長は煩わしく乱れ、その疑問は決せられる。闘い変じ、殺傷し、その団体は捕まる。宿場の長を廻ると同時に大雜派に察す。盜賊は獄に捕まり、むちとゆだめで尻を叩かれる。その仲間が逃亡を謀り、（周囲を）欺き、その調べをせめきり、眞実に反する。

第二十八、座り、患い、害し憐れ足らず、辞は窮み情け無く、宣告文は堅く具わる。ふみを受け驗証を記し年を問う。村里や郷や県ではその事がうながす様に論ぜられ、鬼は新たに白くあきらかになり、鉄の首かせを足かせはつけられ、剃髪する。謹慎させず、自ら戒めさせる。やまらを谿谷と山を拓くのに輸り、こも（水草）と萩は植わっており、課が終わり次第驅寄る。材木を斬って伐り、その株と根を石斤で切る。

第二十九、禍が犯された危ない現場に獄官は行き、欺いた首は悪く少しも愁う事がない。(犯人は)縛り、あがない、脱げ目から亡命して流す。(犯人は)牢獄のある車をいつわり攻撃し、おびやかし奪う。小臣はわざと犯人を助け牢に連れて行く。(犯人は)うち傷つき、入墨の罪をうけ、叫び、犬は吠える。(それらは)乏しく興こり、犬の遠吠えがまじり、さぐり、もとめる。すなわち、ふれ文のしらせが没入するのを覚え、賄を受け周囲は恨み、仇に思いかる。

第三十、そしりへつらい、言葉で争い、互いにさしさわる。憂いに思い、急に事変がさしせまり、独りいさましい。すなわち肯えて、省みて察し、うたい諫め読む。長江けい水と渭水は街中で、曲がる様にはかられており、筆をきわめ、ロウソクの灯火でソロバン(算木)を習い、頼まれ赦し、救い解き、俸禄をおとす。邯鄲(戦国の趙の都)の河は沛(川の名)が流れ、巴(国名)と蜀(国名)がある。潁川は淮水に合流し、集まり記録をこころみる。心がみだれ寄り、汗もみだれ、貪る者は辱かしむ。

第三十一、漢地は広大で容れないものはない。はるか彼方から朝は訪れ、臣は妾を使わしむ。辺境は無事で中国は安らかである。百姓は徳を承け陰陽はなごみ平である。風・雨は時節をしり、栄えないものはない。イナゴや虫は起こらず、五穀は熟成し、賢聖は並び進み、博士や先生となる。長い楽しみは極無く続き、老いてもまた繰り返される。